

# Interview with the Brilliant Students

受賞学生インタビュー 第4回

藝大の在校生・卒業生は、  
公募展やコンクールで栄誉ある賞を受賞し、  
また各分野の最前線で活躍している。  
若き才能がふだんの努力とさらなる意欲を語る。

サロン・ド・プランタン賞・台東区長賞受賞

## 澁澤 星

◆大学院美術研究科修士課程絵画専攻(日本画)1年

私が受賞した「サロン・ド・プランタン賞」は、大学から卒業制作作品に対して授与される賞で、その副賞として台東区長賞をいただきました。4年間の大学生活の節目にあたって精一杯取り組んだ作品をこのような形で認めていただき、大変光栄に思っています。

子供のころからずっと、絵は自分が好きで描いていました。写実表現をおぼえたいと本格的に学び始めたのは高校1年生のころからです。決して努力しただけ結果の出る保証のない絵描きの道に進むことは、幼い高校生の自分にとって、すごく勇気のいる決断でした。周囲の反対にもあいましたが、それでも決して後悔しなくなかったので踏み切ったの

です。絵の道を諦めることを誰かのせいにしたくないということもありました。

さまざまな表現技法があるなかから日本画を選んだのは、素材が人のなかなか超えることのできない「自然」からできているためです。自然の色や質感はとても深く魅力的で、人の手で一から作り出すことはとても困難です。そして私が創り出したい世界の表現に最も合っているのが日本画の素材だと思ったのです。

卒業制作で描いた「萱草わすれぐさに寄す」は、実在の風景ではありませんし、あるがままの写実でもありません。実際に存在しなくても自分の中にある、あるいはあつてほしいと願う風景や世界を描き出そうとしたのです。「カフェバー」という自

分にとってなじみが深い空間を舞台に、グレン・グールドの奏でるバッハの音楽が流れ、紅茶の香りが漂うなかで、立原道造の詩集を読んだり、さまざまな幻想が訪れる……。

また子供のころに暮らしたことのある長崎は、私にとって原風景ともいえる場所で、自然豊かな日本の風土と、オランダや中国などの異国の景色のあいまった独自の雰囲気、私の今の世界観に大きな影響を及ぼしています。

卒業制作は大きな節目ですし、この作品は初めての大作でしたから、人知れず根底にある自分の内世界を表現したかったのです。



澁澤 星「萱草に寄す」2009年

しぶさわ・せい  
1983年東京都生まれ。東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業。卒業制作作品「萱草に寄す」(2009年度)でサロン・ド・プランタン賞・台東区長賞を受賞。2011年春に初めての個展を開催予定。

にたはら・ゆう

1990年福岡県生まれ。2009年東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校卒業。2009年第6回安川加壽子記念コンクール第1位ならびに安川加壽子音楽賞、特別賞。2010年7月、王子ホール(東京)にて初のソロリサイタル。これまで野沢優子、多美智子の各氏に師事。



「第6回安川加壽子記念コンクール」本選演奏風景。  
2009年7月31日、保谷こもれびホール (写真提供: 日本ピアノ教育連盟)



## 第6回安川加壽子記念コンクール第1位

安川加壽子音楽賞・特別賞(全日本社会貢献団体機構賞)受賞

# 仁田原 祐

◆音楽学部器楽科(ピアノ)2年

僕は福岡県大川市の出身で、東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校(以下、藝高)入学のため上京しました。偶然にも、大川市は『のだめカンタービレ』の主人公の出身地だったので、僕がちょうど藝高在学中に大ブームになり、とても驚きました。

祖父の家にピアノがあったので、小さい頃からそれを触って遊ぶのが好きでした。そして6歳からピアノを習い始め、その後、福岡市まで通ってピアノを学ぶようになり、東京の藝高に進んで音楽を続けていくことに両親も背中を押してくれました。

藝高時代は、高い目標を持った友人たちに多くの刺激を受け、伴奏や室内楽などいろいろなことが経験できました。ま

た東京は地方よりも演奏会などが充実しているのととても勉強になります。

高校2年生から3年生にあがる春休みに、パリに約10日間の音楽研修に行く機会がありました。フランス音楽を勉強しはじめた時期だったので、より深く学びたいと考える機会にもなりました。また美術館を観覧するスケジュールも組まれていて、ルーブルやオルセー、オランジュリーを訪ねて印象派の絵画をみるのができたのもすばらしい体験でした。

僕が第1位をいただいた「安川加壽子記念コンクール」は3年に一度開催されるもので、藝大の教授を務められた安川加壽子先生の偉業を伝えていくという目的もあります。安川先生もパリで学ばれ、フランス音楽を得意とされていたので、

コンクールの本選ではフランスの作曲家の曲を演奏することになっていました。

フランス印象派のピアノ音楽の魅力は、曲に描かれた風景が聴き手に思い浮かぶことで、客観的に眼に見える「絵」が重要だと思います。

コンクールでも、先日のソロリサイタルでも弾いたラヴェルの《鏡》は、自分にとってとても大事な曲で、弾くたびに新たな発見があります。ラヴェル自身がピアノを得意としたので、弾けるようになるにつれ、自然と手が音にはまっていく感覚があり、またラヴェルがつけた強弱に従って弾いていくと、ほんとうに色が出てくる。僕の音楽を聴いてくれる人に、色や光を感じてもらえる演奏を目指していきたいと思います。

第20回ザグレブ国際アニメーションフェスティバル  
学生部門「Special mention」受賞

# 田中美妃

◆大学院映像研究科修士課程アニメーション専攻修了

私は、大学院映像研究科アニメーション専攻の第一期生として入学し、今年の3月に修了しました。藝大美術学部デザイン科4年生のとき、卒業を目前に控えて、ちょうどタイミングよくアニメーション専攻の募集が始まったので応募したんです。学部2年生のとき、選択の授業でアニメーションを初めて制作し、絵を1コマ1コマ動かすというところが、自分の性分と合っているように実感しました。そして何よりも楽しかったのです。それで、もう少し詳しく勉強してみようと思っていました。

大学院に進んでみると、1年生のときからみっちり授業が組まれていて、とても充実していました。そして2年にあがると、修了制作の作品にじっくり取り組むことができ、今回、賞をいただいた『つままれるコマ』という作品は、修了制作でつくったものです。

「ザグレブ国際アニメーションフェスティバル」は、クロアチアの首都ザグレ

ブで開催されるもので、アヌシー（フランス）、オタワ（カナダ）、広島（日本）と並んで、「世界4大アニメーションフェスティバル」と呼ばれるほど権威のある映画祭なんです。

今回は、東京藝術大学が「最優秀学校賞」に選ばれたということもあり、また同じ専攻の友人の作品もノミネートされているということもあったので、ヨーロッパ圏に行くのは初めてでしたが、私も思い切って出掛けてみることにしました。

1週間のフェスティバルのあいだに、世界のアニメーションの最先端から回顧上映にいたるまで、さまざまな上映会が行われ、受賞作品が決まりますが、楽しみながら学ぶことができるものでした。私が受賞した「Special mention」という賞は、学生の作品を対象とした「特別審査員賞」と解釈して頂ければいいものだと思いますが、賞が決まったときは本当に驚きました。

フェスティバルは若いボランティアスタッフも多く関わっていて、みんなで運営しているといった手作り感を感じました。また、ふつうの市民の方も大勢上映会を見に来ており、日本よりもアニメーションの敷居が低いことが実感されるものでした。

また、フェスティバルの期間中に、フィンランド、ドイツ、イギリスの学生との公開座談会に参加し、お話しをする機会がありましたが、ヨーロッパの学生は、効率的だという理由から、コンピュータ・グラフィックスを利用した作品づくりが多いことなど、さまざまな考えの作家さんが世界中にいることを改めて感じました。

私の作品には明確なストーリーはなく、台詞もなく、音楽と手書きの絵だけで構成されています。もともと手書きの持つ質感が好きですし、それが醸し出す動きのおもしろさにこだわって作品をつくり続けていきたいと思っています。



田中美妃監督『つままれるコマ』

たなか・みき

1982年東京都生まれ。2008年東京藝術大学美術学部デザイン科卒業。2010年同大学院映像研究科修士課程アニメーション専攻修了。2010年6月、「ザグレブ国際アニメーションフェスティバル」で監督作品『つままれるコマ』が学生部門「Special mention」を受賞。受賞作品はDVD「東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻第一期生修了作品集2010」（東京藝術大学出版会）で観ることができる。